公益社団法人会津社会事業協会　NO.196

協会ニュース

2022

親亡き後について

「親亡き後」の課題が語られるようになって久しいですが、ジョイ利用者も例外ではなく年々、問題が深刻化しており、本人の自立や親の負担軽減などさまざまな問題解決に取り組んでいます。それらの支援をしている中で気付かされ考えさせられることがありました。

＜Mさん＞

３年前に実家からグループホームに入居しました。
20 代で発病しずっと迷惑をかけていたので、今度は自分が年老いた母親の傍で手助けをしたいとの思いがあり、今でも週３～４日は実家で生活をしています。母親から離れ別生活することで、共依存から抜け出し精神的に安定するのではないかと考えていましたが、今は母親を支えることがモチベーションになり病状が安定しているようです。

＜Ｙさん＞

両親との三人暮らしに変化が生じたのは半年前。
家事全般をこなしていた母親が体調を崩し入院。それと同時期に父親も病気が見つかり、Ｙさんの通院・通所の送迎ができなくなりました。早い時期からこうなることを心配していましたが、父親は、「自分は仕事一筋で子育ては母親任せだったこと・娘を躾できなかったことを後悔している」という思いから、「妻も娘も最後まで自分が面倒を見たい」と強く思っていました。しかし、寝たきり状態になった今は何もできない娘でも居てくれるだけで良いと思っているようです。

＜Ｋさん＞

Ｋさんの面倒を見ていた母親が亡くなり、妹と２人で暮らしています。
茶碗さえ片付けられないＫさんが自立することは容易ではなく、互いに年を取り今後の生活を考えた時に、グループホーム入居の選択肢が浮かびます。母親が亡くなった今、互いに要求することが多くなりストレスから喧嘩になるようです。本人はグループホームでの生活を口にしますが、具体的にはイメージできてはいないようです。妹さんは障害のあるＫさんを施設入居させることに後ろめたさを感じているようです。

離れることだけが「親亡き後」ではないのだと思います。死別や別居に関係なくその時を迎えるまでに何ができるか、また何をやっておくべきか…（例えば親孝行、生活スタイルの見直しなど）それまでの時間をどう過ごし、その時をどう迎え、その後をどう生きていくのかを考える過程に、我々は寄り添い、時には見守り、時には背中を押し、時には強く判断を求め、ご本人の決心を促していかなければなりません。そして、生きていける力を維持できるよう、その決心に伴走し続ける覚悟を持っていなければならないと思っています。　（ジョイ）

活動報告　その一　　日中活動と報告

ジョイ３（PM）

午後の活動が終わると、職員が声掛けをする前に利用者の方が率先して掃除をしてくださいます。毎日使用する場所なので、とても助かっています。利用者の方たちも「みんなの役に立っている」「自分たちの居場所」という意識をしてくださっているようです。役割を持つことでの充実感や自分自身の向上にも繋げられればいいなと思います。

GH よりご報告

ついに GH 利用者の方でコロナウイルス感染者が ２ 名出てしまいました。幸い、熱もすぐに引き、重症化はせずに済みました。接触疑いの他の利用者の方とスタッフには訪問看護ステーションアースのスタッフによる抗原検査を受けて頂き、感染が拡大しないように、細心の注意を払いながら業務を続けてまいりました。何とか２名の感染で抑えることができました。

しかし、隔離中の利用者の方の生活の充実についてはやはり難しいところがあり、とても窮屈な生活になってしまいました。今回のことを教訓に引き続き感染予防と、支援の充実を両立できるようにスタッフ一同頑張って行きたいと思います。

活動報告　その二

エンジョイ通信より

杭塗り作業

南進測量さんより、杭塗り作業の依頼を受け、活動しています。2か月に1回約200～400本の杭塗作業で得た工賃を貯めて、秋の旅行代に当てます。「今年はどこに行こうかな～」と楽しみにしています。

こ…このぬりかげん…
む…むずかしい…

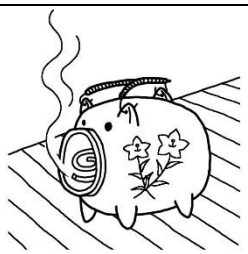
毎年恒例のかき氷!!

今年の夏は暑かったので喜んでもらえました。それぞれに好みの味をチョイスして楽しみました。全部の味を混ぜたレインボーかき氷というものもありました。屋台のかき氷屋さんをイメージして飾り付けを行いましたが、お祭り気分を味わってもらえたかな？

おひとつ　いかが～

まちきれないわ～
あたしの　キ　モ　チ

ひとコマ



コロナ禍で私たちの生活は様々な変化を強いられました。外出制限やマスク生活、余暇活動の制限など…しかし、よく考えてみると、普段から私たちは逃れられない変化を受け入れて生きていることを思い出します。今月も『老い』という変化から老人ホームへの入居を決めた B さん（74 歳）が旅立ちます。しっかり決断でき、良かったと思っていたのですが隣人の A さん（70 歳）は納得がいっていない様で職員にこう訴えてきました。

A さん：「B さんも行っちまうのか…寂しいけど仕方ないな…。でも B さんが心配してたんだよ！何もやることないといられないから心配だって。だから俺言ったんだよ！無理して行くことないって！コロナで制限あるから牢獄に行くようなものだぞって！」

しかし入所手続きを進めていくうちに、余暇活動も十分にできることが分かり、B さんは安心して入所を決めることができました。そのことを A さんにも伝えると、

A さん：「それは良かった！コロナ禍で老人ホームも牢獄みたいに制限が厳しいと思っていたけど、ちゃんと楽しみもあるんだな。俺も考える歳だから本当に安心した！」

と、笑顔で語ってくれました。さらに A さんは続けます。

A さん：「ちょっと疑問があるんだけど、老人ホームは最後までいられるのか？俺はどこで死ぬんだろう？医療が必要な時は病院？介護は特養？色々あるんだなー。もちろんグループホームでもいいんだろ？今まではいざとなったら一人暮らしでもいいと思ったこともあったけど、体が動かなくなったときはやっぱり人がいた方がいいよな。一人じゃ何にも楽しくないよ。でも最後までどこかしらで面倒見てくれると聞いて安心したよ！」

今までは老化する自分や、周りの変化を受け入れることが難しかったように思えた A さんですが、A さんなりに人生の終わり方などを考えていたようです。受け入れてなかったわけでは無く、不安だったのでしょう。いつもは親分肌でみんなを引っ張る A さんの『本音』を聞けた気がした今回のひとこまでした。

面接の最後に A さんが話した言葉を今回のオチにさせて頂きます。

「まあ、俺はまだまだ大丈夫だけどな！」

A さんらしい締め方でした！

編集後記

コロナウイルス感染者が出たということで GH 内で隔離の措置をとらせて頂きました。そのような場合に如何に生活の充実を担保していくのか、難しい課題でした。たった 10 日と言えども、利用者の方たちにはとても長い 10 日間です。買い物代行などしてできる限り対応しましたが、それでも充実には程遠かったようです。

『感染拡大防止』と『生活の充実』。バランスがとても難しかったです。

今後の教訓に出来ればと思います。　　(T)